

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	ディスカッション活動を通して留学生と日本人学生は何を得たか：学びと友人関係構築に焦点を当てて
Author(s)	菅川, 裕希
Citation	広島大学日本語教育研究, 32 : 8 - 15
Issue Date	2022-03-25
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/52106">10.15027/52106</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052106">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052106</a>
Right	Copyright (c) 2022 広島大学大学院人間社会科学研究科日本語教育学プログラム
Relation	



# ディスカッション活動を通して留学生と日本人学生は何を得たか —学びと友人関係構築に焦点を当てて—

菅川裕希

## What International and Japanese Students gained from Discussion Activities: Focusing on Learning While Building Friendships

Yuki SUGEKAWA

キーワード：ディスカッション、異文化理解、留学生、日本人学生、友人関係の構築

### 1. はじめに

近年、日本の大学において留学生が増加しており、夢や目標を持って日本へやってきた留学生が抱える問題は学習、経済、交流、対人関係など多岐に渡っている(加賀美 2007、横田・白土 2004)。筆者が担当する「日本事情」を受講した留学生からも「日本人と友達になるのは難しい」「授業で一緒に発表したがそれっきり」「一度食事に行ったことがあるが、その後連絡をとっていない」など、日本人学生と友人関係を築くことが難しいという声を聞いてきた。実際に、日本人学生と同じ教室内で留学生が学んでいても、交流や日本語を使用する機会に恵まれているとは言えない。また、日本人学生との交流を留学の目的としている留学生も少なくないだろう。守谷 (2015) は、留学生支援のための日本語教育の役割として「対人接触のための援助を教育実践にどのように採り入れていくか」を課題として挙げている。その課題に関して、留学生・日本人学生が協働で学ぶ授業実践が行われており、実践報告も多く見られる。日本人学生の日本語授業への参加や留学生と日本人学生の合同授業など、授業形態や授業内容、活動スタイルは様々であるが、ディスカッションを行った効果としては、交流機会の創出、異文化理解の促進、自文化の再認識などが報告されている(坂本 2013、鈴木・島崎 2002、高橋 2005、永井 2012、永井・南浦 2014、安井 2008)。これらの研究は、留学生・日本人学生の学びに焦点を当てたものであり、友人関係の構築について述べた研究は多くない。永井 (2012) では、留学生のアンケートの結果、授業外の交流はあったが、

友達になれたという回答は多くなかったことを報告している。安井 (2008) では、留学生のアンケートの結果、「友達作り」について満足度が高くなかったことを報告しているが、どのような友人関係が構築されたかについては言及されていない。

そこで本稿では、留学生と日本人学生の相互理解、交流の促進を目的として、「日本事情」の授業に取り入れたディスカッション活動について、①留学生はディスカッション活動をどのように評価し、どのような学びがあったのか、②日本人学生はディスカッション活動を通して、どのような学び・気づきがあったのか、③留学生、日本人学生がどのような友人関係を築くことができたのか、という3つの観点から考察を行う。なお、当初対面授業で実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、遠隔での授業形式への変更が余儀なくされた。調査結果はその影響を受けていることが否めないため、この点を考察に含めた。

### 2. 授業の概要

「日本事情 I A」「日本事情 I B」は、日本社会や日本文化への見識を広めることや日本語能力の充実を図ることを目的として、留学生を対象に前期(各15回)に2コマ続けて開講される科目である。「日本事情 I A」では、日本社会や文化についてディスカッション活動を行い、「日本事情 I B」ではテキストを読んだ後、日本・留学生の国について調べた内容を比較しながら意見交換をする授業である。これらの科目は、例年ベトナム、中国、韓国出身の留学生が受講する。

本稿では、「日本事情 I A」で、留学生と日本人学生が行ったディスカッション活動の実践について取り上げる。本実践は、2012年より筆者が担当し、学生からの授業評価や感想、筆者自身の内省をもとに、活動スタイルや扱うトピックなどにおいて改良を加えてきた。また、筆者は地域の日本語教室にも携わっており、生活場面における生きた日本語の学習や日本社会を理解するうえで、日本人との直接的な交流の重要性を感じてきた。大学においても、日本人学生との交流が、留学生の日本社会への理解を深めると考え、ディスカッション活動に日本人を招き入れた。「日本事情 I A」は留学生対象の科目であるため、日本人学生には単位は与えられないが、教師の呼びかけに応じて日本人学生が2名参加した。

## 2.1. 受講者と日本人学生

2021年前期の受講者は、1年生のベトナム人留学生4名（男性2名、女性2名、留学生A～D）で、全員2～3年間日本語学校に在籍し、現在日本語能力試験N2（留学生C、D）、N1（留学生A、B）合格を目指している。なお、留学生Bは、日本で3年間技能実習生の経験があり、在日期間が6年である。4名は、大学入学前にアルバイト先の日本人と飲み会やボーリングなどの個人的な交流がある。大学生生活の目標に、日本語の上達と日本人学生と友達になることを挙げており、日本人学生との交流に非常に意欲的であった。

留学生の日本に対するイメージを調査するために、初回授業で日本・日本人について連想する言葉をそれぞれ9つ書いてもらった。「経済」「和食」「漢字」などの日本社会・文化・言語に関する言葉が36語中32語で、日本人に関する言葉は「独立」「考え方（固い）」「まじめ」「冷たい」の4語であった。留学生Cが「日本人は親切だけど、冷たい」と説明すると、他3名も同意見であった。

ボランティア日本人学生は3年生2名（女性、日本人E、F）である。日本人Eは留学経験がなく、外国人との交流は英会話教室や高校でのALT英語教員との会話程度である。参加動機は、留学生と交流がしたいからであるが、勇気がなく交流できずにいたと言う。日本人Fに誘われ、参加することにした。授業中、物静かで、慎重に言葉を選びながら発言していた。日本人Fは、2019年5月より4学期間（2年間）「日本事情」の授業で中国、ベトナム、韓国出身の留学生とディスカッションを行い、授業外でも交流がある。参加動機は、留学生と交流したいからであり、大学入学後、中国へ2週間の留学経験がある。友人からコミュニケーション

ン能力が高いと言われており、授業では自分の考えや疑問点についてはっきり発言する様子が見られた。

## 2.2. 授業の目的

この授業は、一方的な講義形式ではなく、以下の4点を目的に、留学生・日本人学生が日本に関するトピックについてディスカッションするものである。

- (1) 留学生がプレゼンテーションの方法を学ぶ
- (2) 留学生の日本語能力を向上させる
- (3) 留学生・日本人学生が異文化理解を深める
- (4) 留学生・日本人学生へ交流機会を提供し、授業外の交流促進につなげる

(1) については、毎年入学してくる留学生は、日本語学校でプレゼンテーションの経験があるが、それらはグループ活動であることが多く、時間の関係上、回数も多くない。学生生活で演習やゼミ形式での発表をする際、留学生自らがテーマを設定し、必要な情報収集・分析、わかりやすい発表資料の作成、発表で聞き手を考慮し、自身の考え・意図を正確に伝えることが必要だと考えた。そのため、教師がディスカッションのトピックを用意するのではなく、留学生の積極的な取り組みを期待して、自ら設定させた。(2)については、ディスカッション前の準備として、自らが必要である語彙や表現を学習するように促した。(3)、(4)については、ディスカッションを通して、留学生・日本人学生が互いの文化的背景、価値観を理解すると同時に、友好的な関係を作り、授業外の交流へとつながることを期待した。

## 2.3. 授業の内容

初回授業のオリエンテーションでは、クラスの雰囲気作りのために、留学生A、Bと日本人E、Fがペアに分かれ、互いの共通点を探す活動を行った。但し、留学生C、Dは欠席であったため、共通点を探す活動に参加していない。第2回から第14回までディスカッション活動を行った。第15回では、留学生・日本人学生が、互いの国について作成した質問に答える時間を設けた。なお、第1回から第5回までは対面で実施し、第6回から第15回までは遠隔で実施した。

ディスカッションのトピックは6つであった(表1)。トピックの選択については、オリエンテーションで「生活の中で問題意識をもったものを取り上げるように」と説明した。トピック①、②はモデルとして授業担当者である筆者が設定し、トピック③～⑥は留学生が設

定した。筆者は、留学生・日本人学生にとって身近なもので、多角的な視点から捉えられ、コミュニケーションが促進されると考え、トピック①、②を取り上げた。

表1 ディスカッションのトピック

1回	オリエンテーション（共通点を探す活動）
2回	・①の記事を読んで内容理解 ・資料作成、発表からディスカッションの流れ、宿題
3, 4回	①・制服私服選択制に賛成かどうか ・自由、多様性、個性を認めることは教育においてどんないいことがあるか
5, 6回	②教科書にマンガを取り入れるべきか
7, 8回	③・オンラインと対面授業はどちらがいいか ・コロナの影響で、すべての授業は遠隔でいいのか
9, 10回	④セルフレジと手打ちレジはどっちのほうがいいと思うか
11, 12回	⑤日本の若者は一人暮らしをしたほうがいいか、家族・友人と一緒に住んだほうがいいか
13, 14回	⑥・家を買うかそれとも借りるか ・買うなら、何歳ぐらいがいいか ・「自分の家を建てるようになって初めて“一人前”」という考え方をどう思うか
15回	質問タイム・まとめ

トピックについての発表からディスカッション活動の流れを図1に示す。ディスカッション前にトピックについて理解を深め、根拠と共に自分の意見が述べられることやディスカッションの振り返りをねらって、1つのトピックを3週続けて扱うように計画した。

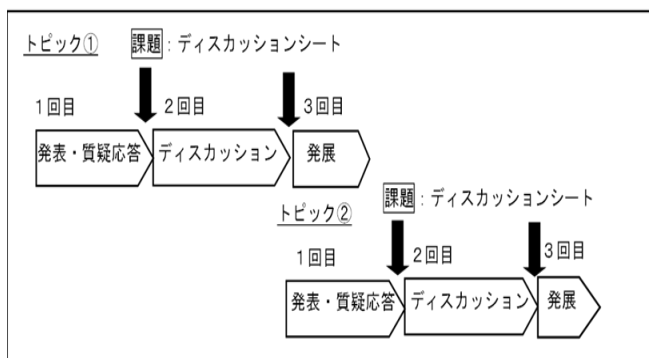


図1 ディスカッション活動の流れ

各トピックの1回目は、トピックを設定した留学生が調べたことについて発表し、質疑応答を行った。2回目はグループに分かれてディスカッションを行い、各グループで話した内容についてクラス全体で共有した。3回目はそのトピックに関して理解が深まるよう、筆者が講義、またはトピックに関連する内容についてディスカッションを行った。

ディスカッション前後には、ディスカッションシート、ディスカッション時に使用される語彙、表現の学

習を課題とした。ディスカッションシートは、ディスカッション前の考えやその根拠、ディスカッションで出た意見、ディスカッション後の自分の考えを記述するものである。

### 3. 調査目的と方法

本調査の目的は以下の3点を明らかにすることである。

- ①留学生はディスカッション活動をどのように評価し、どのような学びがあったのか。
- ②日本人学生は、ディスカッション活動を通して、どのような学び・気づきがあったのか。
- ③留学生、日本人学生がどのような友人関係を築くことができたのか。

全15回の授業後、留学生、日本人学生にGoogle Formを用いてアンケート調査を実施した。両者に共通する質問項目は、ディスカッション活動の評価と学び、授業外の交流についてであった。日本人学生に対する質問は12問であったが、留学生に対しては、日本語能力、日本人のイメージ、日本人学生との交流意欲についての項目を加え、14問であった。また、留学生科目に招き入れた日本人学生の学びや気づきについて知るために、アンケートをもとにインタビューを行った。インタビュー後、録音内容を聞きながら記録メモと照らし合わせ、最終記録を作成した。最終記録をもとに上記の②～③について分析を行った。

### 4. 結果と考察

本章では、留学生のアンケート調査の結果から「ディスカッション活動に対する評価」「日本人に対するイメージの変化」「日本語能力向上の実感」について述べ（3-①）、日本人学生のアンケート調査、インタビューの結果から「日本人学生の学び・気づき」「授業外の交流」について述べる（3-②、③）。また、留学生、日本人学生のアンケート調査、日本人学生のインタビューの結果から「ディスカッション活動の問題点・課題」について述べる。なお、アンケートの回答やインタビューのコメントにおいて、特に重要な意味を持つと筆者が判断した部分に下線を施した。

#### 4.1. 留学生の評価と学び

留学生は日本人学生とのディスカッション活動を

「(留学生A) すばらしかったです」「(留学生B) 楽しかったです」「(留学生C) 日本人についてもっと深くわかるようになりました」「(留学生D) 面白かった」と評価している。日本人学生とディスカッションするメリットについて「(留学生A) 国が違うと教育環境も違います。それにつれて、考え方や生き方も異なります。相手の話を聞くと相手の世界観を知り、自分自身が変わります」「(留学生B) 日本人学生とディスカッションしたら日本語も上手く話せるようになるし、お互いの国だけじゃなくて日本人の考えもよく分かるようになるから」「(留学生C) やはり国籍が違うので、異なる考えも出てきます」「(留学生D) 日本人と交流することができるし、お互いのこともよく分かって仲が良くてたくさん大学で友だちができますと思います」と述べており、自分自身の変化や日本語能力の向上、異文化理解の促進、友達作りのきっかけになると考えていることがわかる。

また、日本人学生とディスカッションすることが、留学生の日本・日本人へのイメージ変化に影響するかを検討するために、「ディスカッション活動の前後で日本・日本人のイメージが変わりましたか」という質問を設けた。留学生4名中3名(留学生A、C、D)は「変わった」、1名は「(留学生B) 変わらなかった」と回答した。「変わらなかった」と答えた留学生Bは「最初日本人は優しいと思っています。そして今でもその考えは変わってないです」と回答しており、肯定的イメージをそのまま維持していることがわかった。「変わった」と回答した3名(留学生A、C、D)は、変化について「(留学生A) 日本人は明るい人だと思えるようになりました」「(留学生C) 日本人が冷たいと思ったのですが、だんだん話して、国の性格で表す方も違う」「(留学生D) 最初日本人のイメージは冷たいし、ベトナム人のことが好きじゃないと思いますが日本人と交流してそうじゃなかったです」と説明しており、日本人学生とディスカッションしたことにより、否定的イメージが変化したことがわかった。

このように、日本人に対するイメージの変化が見られたことは、ディスカッション活動において日本人学生と友好的な関係が築けたことを意味すると考えられる。これらは、今後の日本での生活に大きく影響すると推測できる。

また、日本語能力に関して、「そのテーマについて、日本語で調べ、ディスカッションを行いました、日本語が上達したと思いますか」という質問に対して、「上達した」と4名が回答し、「(留学生A、B、D) 発言力・コミュニケーション力」「(留学生C) そのテ

マに関する語彙」において上達を実感していることがわかった。「発言力・コミュニケーション」については、ディスカッション活動において、相手の意見を聞いたり、自分の意見を話したりすることが求められていたことが影響したと考えられる。語彙について、劉(2016)は「ネイティブ教師の指導方針のみでは、現実社会の言語活動において対応するのに必要な語彙が十分含まれているとは言えない」と指摘し、「現実社会の言語活動において対応するのに必要な語彙」の学習の必要性について主張している。ディスカッション内容を共有した際に、「チャット、セルフ(レジ)、一人前、リフォーム(級外)、「リモートワーク、SNS」(その他)、「おもてなし、らくがき、回転率」(該当なし)などの語彙が見られた。これらの語彙は、「リーディングチュウ太」のレベル判定で、級外、その他、該当なしであり、テキストでも学ぶ機会がない、つまり、現実社会の言語活動において使用されるものであると思われる。このことから、本実践でのディスカッション活動は、あるテーマに関する語彙を学び、使用する機会を提供しただけでなく、日本人学生の参加によって「現実社会の言語活動において対応するのに必要な語彙(劉2016)」の学習機会につながったと捉えられる。

## 4.2. 日本人学生の学び・気づき

### 4.2.1. 共通する観点のコメント

ここからは、日本人学生の学び・気づきをまとめるにあたり、初めて参加した日本人Eと、4学期間(2年間)継続して参加した日本人Fによるアンケート、インタビュー結果の共通点と相違点について述べる。

まず、両者に共通して見られたのは、考え方や視点についてのコメントである(例1)。アンケートの「留学生とディスカッションをして、自分にとってよかったことは何ですか」という質問に対して、日本人Eからは「今まで関わったことのなかったベトナムの方と触れ合えて、興味をもつ国が増えました。異文化に触れたことで、日本を俯瞰して見られたこと」と、ベトナムへの興味を抱いたことや客観的視点で日本を見る面白さが記述されている。インタビューのコメント(例1)からは、留学生の考え方の違いや異なった視点からの意見にも面白さを感じている。日本人Eにとって、留学生とのディスカッションが初めてであったため、新しい発見が多く、留学生の国への興味につながったと考えられる。

日本人Fは、上述の質問に対して「留学生の日本に対する様々なイメージが聞けたこと」と回答した。インタビューのコメント(例1)でも「ベトナムから見た

日本」について「個人の目線」という表現と共に述べていることから、留学生の話を「ベトナム人の意見」ではなく、目の前にいる「個人の意見」として捉えていると考えられる。

#### 例1 考え方・視点(日本人学生 E、F)

(日本人学生 E)

・ディスカッションしたことないテーマが多かった。  
人の考え方の違い、違った視点から日本を見るのが面白い。  
・日本と違う考え方に触れられた。

(日本人学生 F)

・ベトナムから見た日本のイメージ=アニメというのを聞いてうれしい。政治的じゃない、個人の目線で見た日本のイメージ。  
・ベトナムから見た日本、どのように見ているかが聞けて良かった。それが一番気になる。  
・コロナの対応が遅いという話になった時に、やっぱり(留学生も)そう思っているのかと思った。そういうのが聞けたのが、いいポイントだったと思う。日本のことをそういう風に考えているんだなと思った。

また、日本人 F は、「個人の意見」が聞けることにディスカッション活動に参加する意義を見出していることが窺える。3つ目のコメントでは、日本人 F が感じている日本のコロナ対応の遅さについて、留学生も同じ意見であったことから、「国」が異なっても考え方が共通しているという気づきが見られた。日本人学生と留学生の考え方の違いを個人の考え方の違いとして捉える姿勢や考え方に共通性があることは、永井・南浦(2014)でも報告されている。

#### 4.2.2. 異なる観点のコメント

ここでは、日本人 E、F における異なる観点のコメントについて述べる。日本人 E は「留学生の言語能力」「自分自身の変化・成長」について、日本人 F は「授業外の交流・交流を深める難しさ」について言及している。

日本人 E から、留学生の日本語が予想以上に上手だったことに驚いたが、ディスカッションを重ねるにつれ、日本人学生と留学生の意見の述べ方の違いに気づいたという「留学生の言語能力」(例2)についてのコメントが見られた。これらの気づきも初めてのディスカッションであったことが関係していると考えられる。

#### 例2 留学生の言語能力(日本人学生 E)

・共通点を探す活動(オリエンテーション)に参加して、言葉が通じないと予想していたが、ベトナム人は日本語が上手だった。  
・(日本人とのディスカッションと違う点は)日本人は意見を言って、理由で終わりの印象があるが、ベトナム人は自分の意見、理由、それを根拠づける経験などをたくさん話していた。そこは(日本人と)違うかなと。4人の性格にもよると思うが、自分をはっきり表現していたと思う。

「自分自身の変化・成長」(例3)から、日本人 E は留学生が理解できるように、わかりやすい言葉を選択したり、大事なことを強調したりしていたことがわかる。言語調整や話し方の工夫をしたことで得た「伝わる」という成功体験を通して、伝えることに対する苦手意識が自信に変わり、伝える力の上達を実感したと考えられる。さらに、新しい挑戦に対して前向きな姿勢が見られ、「もっと色々な人と関わりたい」という交流への意欲を示している。このような相手を配慮したコミュニケーションの方法や、交流に対する前向き且つ意欲的な姿勢は、異文化接触場面において人間関係を構築する上で非常に重要である。

#### 例3 自分自身の変化・成長(日本人学生 E)

・自分が意見をまとめて言うのが得意じゃなかった。通じるような言葉を選ぶのが難しかった。大事なことは強調して言うとか、伝え方が上達したと思う。  
・新しいことにチャレンジする勇気がでなかったが、自分の語彙力、伝える力も向上したのかなと思います。  
・新しいことにチャレンジする勇気がなかったが、とりあえずやってみよう、ポジティブに考えられるようになった。もっと色々な人と関わりたいと思った。

日本人 F がインタビューで多くコメントしていた「授業外の交流(例4)・交流を深める難しさ(例5)」について、日本人 E からはほとんど見られなかった。アンケートでは日本人学生 2 名が留学生と仲良くなれたと回答したが、実際には日本人 E が留学生と授業外で交流する機会は全くなく、インタビューでは「遠隔授業だったので、まだ積極的に話せなかったのも、そこまで仲良くなっていない」とアンケートの回答と異なるコメントをしている。また、授業形態の違いについて「ほとんどがオンラインだったので意思疎通が難しかったです。対面での授業では、スムーズに会話できてよかったです」とも述べている。授業では会話がス

ムーズにはこばれていたため、両者の関係は良好であるように見えたが、遠隔授業になったことで積極的に会話ができなくなり、心理的距離が縮まらなかった可能性がある。推測の域を出ないが、遠隔授業では複数人が同時に発話すると、声が聞きとりにくくなるというシステム上の問題があるため、会話ターンを待たなければならないことが、積極的な発話を妨げる一因となったと考えられる。また、日本人 E の伝えることに対する苦手意識が、より距離を生んだ可能性がある。

一方で、日本人 F は、大学内外で食事をしたり、一緒に出かけたりすることはなかったが、授業外で LINE で話す機会があった。日本人 F は、オリエンテーションの共通点を探す活動で共通の趣味があることがわかった留学生 A から LINE の連絡先を交換しようと言われ、継続して連絡をとっていた。コース途中で、留学生 A に映画に誘われたが、大学がある県では緊急事態宣言が発出されており、両親の反対もあって実現しなかった。その後、日本人 F は留学生 A を通して、留学生 4 人が計画した海水浴に誘われ、日本人 F が日本人 E に声をかけ、共に行く予定にしている。留学生と日本人学生の合同授業について報告した安井 (2008) は、「友達作り」の評価が低い理由として、留学生と日本人学生の交流が授業時間に限られていた可能性を指摘している。本実践は第 6 回から遠隔授業であったため、授業外での接触機会はほぼない。しかし、日本人 F は LINE での交流から、映画や海水浴など授業外の交流へと深まりを見せている。これは、共通点を探す活動で共通の趣味という「きっかけ」があり、LINE の連絡先の交換という留学生の「積極的な行動」で、授業外の交流へと進展した一例だと言える。つまり、教室でのディスカッション活動は人間関係を築く「きっかけ」であり、授業外の交流につなげるには「積極的な行動」が必要だと考えられる。

#### 例 4 授業外の交流 (日本人学生 F)

・同じ映画好きの人と LINE で連絡をしていた。初回授業で共通点探しをして、趣味が同じだったので。  
・積極的なベトナム人 4 人だったので、スムーズに仲良くなれた。

しかし、授業外の交流があった日本人 F であっても「交流を深める難しさ」(例 5)を感じていたことがわかった。

#### 例 5 交流を深める難しさ (日本人学生 F)

・今までは 4 限までいて、授業が終わったあと「今か

らバイト？」など雑談ができたけど、3 限までだと雑談ができなくなった。さらに、オンライン授業だと (授業中、休憩時間の) 雑談ができなくなり、(仲良くなる) 次のステップにつながりにくいと感じた。

・ベトナム人 4 人が仲がよくて、友人関係が形成されているから、私たちが (留学生を) 誘わなくてもっていうのがオンライン上だけだと、次のステップに踏み出すのに躊躇する気持ちがあった。

・(大学内で) 留学生 B さんを見かけたけど、マスクしてるから本人かどうかわからないので、声をかけなかった。

・(大学内で) 留学生 D さんを見かけたけど、わざわざ話しかけに行くのもっと思ってやめた。私のことがわかるのかって思って躊躇した。

日本人 F は、2 コマ続けて開講される「日本事情 I A」「日本事情 I B」に、先学期まで参加していた。しかし、今学期は受講科目の関係で 1 コマ目しか参加できず、授業終了後すぐ退室してしまうため、留学生と授業以外の会話をする機会がなかった。その上、遠隔授業になったことで、直接会話すること(雑談など)ができなくなり、留学生との交流の難しさを感じていたと思われる。日本人 F は先学期に、大学内で留学生を見かけたら積極的に話しかけていると話していたことから、授業外でも交流を深めることに積極的であったが、遠隔授業の影響で実際に顔を合わせる機会を失ったことが、友人関係の構築に影響を与えていた可能性がある。それが、学内で見かけた時、話しかけるのを躊躇した理由であると考えられる。

同時に、留学生たちの様子も、積極的な行動を起こすことに躊躇した理由の一つだと述べている。例えば、「ベトナム人 4 人が仲がよくて、友人関係が形成されているから、私たちが (留学生を) 誘わなくても」「ベトナム人 4 人の仲がよいから」というコメントがある。大人数の日本事情講義での留学生、日本人学生の意見から、国際理解を促進する要因・阻害する要因について検討した高松 (2001) では、「「グループ」の存在が友だちになることを阻害している」と指摘しており、留学生 4 名が同じ国籍で、非常に仲がよいグループであったことが、積極的に交流しようとする行動につながらなかったと考えられる。

### 4.3. 問題点と課題

ここでは、留学生と日本人学生のディスカッション活動に対する問題点と課題について述べる。留学生は

ディスカッション活動について「(留学生A) 情報をさがすのが難しいです」「(留学生B) 言いたいこと、伝えたいことがあっても上手く伝わらない時もあります」「(留学生C) 知識が足りない所で、ディスカッションの時、根拠が納得ならないことです」「(留学生D) テーマを選ぶことです。何のテーマでやったらディスカッションしやすいかよく分かりません。そしてそのテーマの根拠です」と述べており、情報収集や相手に伝えること、トピック選択の難しさを感じていたことがわかる。

情報収集については、個人作業ではなく、日本人学生と留学生が協働で行うことで、より多くの情報が得られると考えられる。また、教師がキーワードや基本的な資料を提供することで改善すると思われるが、学生の自主性を尊重する上で、どの程度教師がサポートするのかについて検討する必要がある。

相手に考えを伝えることは、話す側の日本語能力はもちろん重要であるが、聞く側の理解しようとする「姿勢」や理解したことを示す「反応」の有無が関わっていると考えられる。授業では、日本人学生の理解したかどうか分からない表情や反応が見られた。聞く側が理解できない時、理解できないと伝えたり、わからないことについて質問したり、何らかの意思表示をすることで、コミュニケーションや互いの理解が進むであろう。

日本人E、Fからディスカッションのトピック選択についても言及が見られた(例6)。

#### 例6 ディスカッショントピックについて

(日本人学生E)

・みんなの意見が一緒にひろがらなかった。雑談したりした。

(日本人学生F)

・いつもは重いテーマだったが、今回は重くない。ディスカッションがすぐ終わるような内容だった。意見を言って(みんな同じ意見だった)ので、すぐ終わる。ディスカッションが浅いと感じた。学びは少なかった。

日本人Fは、先学期までのトピックと比較し、述べている。先学期までは社会問題に関するトピックが多く、日本人Fにとって考えたことのないテーマであったため、新しい発見があり、学びが多かったと判断したと推測できる。トピックは、「生活の中で問題意識をもったもの」を選択するようにと説明していたが、今回のトピック③～⑥は問題意識のあるものではなく、

価値観に関するものが含まれている。価値観に関するトピックの場合、グループのメンバーが同意見であれば、考えと根拠を述べるだけで終わってしまう可能性があり、深い学びにつながらない。トピックの種類によって、学びの量が変わってくるため、学生のレディネスを十分に考慮する必要があるという指摘もあるように(鈴木・島崎2002)、トピック選択は留学生の自主性だけに任せるのではなく、興味があるトピックを持ち寄ってグループで検討するなど時間をかけて行わなければならない。また、北出(2010)は、より深い学びを得るためには、「新しい発見や意見構築につながるようなさらに踏み込んだ質問や異なる意見を述べていく必要がある」と指摘している。「何をディスカッションするか」だけでなく、「どのようにディスカッションを進めるか」も重要であり、コミュニケーションを促進させる方法について学生に説明することも有効ではないだろうか。

## 5. おわりに

異文化接触が不可欠な日本社会において、留学生と日本人学生が共に学び合うということは、異文化理解、異文化間コミュニケーションという観点からみると意義深い。日本人Fは、「「日本事情」の授業で共に学んだ交換留学生に、留学先で再会し、サポートしてもらった。それがきっかけで、帰国後もっと留学生に積極的に接しようと思った」と言う。このように、授業内での学びや交流は授業外へひろがっていく可能性があり、日本人学生がサポートを受ける側になることもあるだろう。加賀美(1999)では、「第一として、大学コミュニティにおいて日本人学生と留学生との異文化間接触が日常的に行われ、次いで、異文化間ネットワークが自発的に形成されるような社会的環境が設定されることが重要である」と述べられており、今後、大学内で異文化接触の環境整備が重要だと考えられる。

しかし、その機会はまだ多く設けられているとは言えない。本稿は、授業担当教員の判断で、授業にボランティア日本人学生を招き、ディスカッションに参加してもらうことで、双方の学びや気づきがどのように起こったのか、どのような人間関係の構築がなされたのかについて報告したが、継続的な異文化交流が行われるためには、このような授業実践に加え、大学側がサポーター制度を運用したり、教員に双方が交流できる機会の創出を呼びかけたりするなどの取り組みを行っていくことも重要ではないだろうか。

最後に、今回の報告は、少人数の授業の実践例である



ため、留学生の国籍や人数、ディスカッションのトピック、授業内容によって気づきや学びが異なると考えられる。今後も、試行錯誤をし、学びの多い教室活動を検討していきたい。

謝辞：本稿執筆にあたり、広島大学の小口悠紀子先生より貴重なご意見を賜りました。留学生、日本人学生の皆様より多くのご協力をいただきました。この場をお借りして、皆様に心より御礼申し上げます。

## 参考文献

- 加賀美常美代(1999)「大学コミュニティにおける日本人学生と外国人留学生の異文化間接触のための教育的介入」『コミュニティ心理学研究』第2巻第2号, pp. 131-142.
- 加賀美常美代(2007)「7. 異文化間問題(3)外国人留学生の支援体制と連携」日本コミュニティ心理学会編, 『コミュニティ心理学ハンドブック』, pp. 769-774.
- 北出慶子(2010)「留学生と日本人学生の異文化間コミュニケーション能力育成を目指した協働学習授業の提案：異文化間コミュニケーション能力理論と実践から」『言語文化教育研究』9, pp. 65-90 .
- 坂本利子(2013)「異文化交流授業から国内学生は何を学んでいるのかー多文化共生力育成をめざしてー」『立命館言語文化研究』24-3, pp. 143-157.
- 鈴木庸子・島崎美登里(2002)「JLP と ELP による国際交流授業ー討論とグループ・プロジェクトの試みー」『ICU 日本語教育研究』11, pp. 69-78.
- 高橋亜希子(2005)「日本人学生と留学生とが共に学ぶ意義」『宮城教育大学紀要』40, pp. 15-25.
- 高松里(2001)「「日本事情」講義を通じた国際理解教育ーフィードバックを用いた大集団ディスカッションの試みー」『九州大学留学生センター紀要』11, pp. 15-27.
- 永井涼子(2012)「日本語授業におけるビジターセッションの取組と意義ー日本人学生・留学生双方の視点からー」『大学教育』9, 53-64.
- 永井涼子・南浦涼介(2014)「大学授業において留学生と日本人学生は共に何を学べるか：留学生教育と社会科教員養成をつなぐ試み」『大学教育』11, pp. 49-66.
- 守谷智美(2015)「留学生支援としての日本語教育の可能性」『大学教育研究紀要』11, pp. 139-150.
- 安井朱美(2008)「留学生と日本人学生との合同授業の試みーコメントから見えてくるものー」『南山大学国際教育センター紀要』9, pp. 114-128.

横田雅弘・白土悟(2004)『留学生アドバイザー学習・生活・心理をいかに支援するかー』, ナカニシヤ出版.

劉志偉(2016)「日本語学習者から見た語彙シラバス」『ニーズを踏まえた語彙シラバス』くろしお出版, pp. 95-114.

## 資料

日本語読解学習支援システム『リーディングチュ太』  
<https://chuta.cegloc.tsukuba.ac.jp/>  
(2021年10月28日)